

「わたしの国語教室」経営案を作る

—指導書は発想の参考にする心構えて—

一徹国語人

いよいよ新年度が始まった。先生方にとっては、新年度の準備から始まり、四月は何かと忙しい時期だと思う。そんななかで、ある若い先生から、これからの一年間、どんなふうに国語学習を進めていこうか悩んでいる、指導書を見ても、自分のクラスの子どものたちのレベルとは合わない気がする、という意味のことを質問された。そこで、今回はそのことについて書いてみたいと思う。

まずは基本的なこととして、身長・体重をはじめとする身体測定や健康診断、学校によってさまざまかもしれないが、学力検査・スポーツテスト・家庭訪問などを通して、児童はもろろんのこと、家庭の思いや周囲の環境といったことまで理解する。学級児童会や学級懇談会でも児童の気持ちや保護者たちの願いなどがかなり理解できる。スポーツテストで何を、と不思議に思われるかもしれないが、体格や体力が変化すると、物事に対する興味・関心も変化し、理解の広がりや深まりにも変化が起

こる。運動能力の変化にいたっては、感性そのものにも大きく影響することが実に多いのである。

四月は学級づくりのための幅広い児童理解月間だ。校外遠足のようなものを実施し、一人一人の児童の性格や人柄、能力などを見定める学校も多いように思う。

五月は、そのようにして集めたデータをもとに学級経営の案を組み立てる月だ。

児童の友人関係図や家族構成一覧表といった伝統的なデータを加える先生がいるかもしれない。逆に、児童が日常生活で使用している言語一覧表といった斬新なデータを組み込まれる先生もいるかもしれない。いずれにしても、さまざまなデータから分析された学級の子どもの像が浮かび上がると、それに沿っていくつもの項目の経営案が組み立てられる。例えば、読字・書字力、音読・朗読力、文章の理解・表現力、語彙力、話す力・聞く力、集団での話し合う力や発表力、想像的鑑賞力、論理的思考

力等々を分析し、この一年かけてそれらの力をどのような育てていったらよいかを考える。例えば、次のような具体的な方策が浮かび上がってくるはずである。

●学級の朝の会や終わりの会の運用法

日直や学習係の子が今朝のニュースとか今日の出来事を報告する場にする。あるいは、好きな詩の朗読など。

●曜日を決めて読書タイム

担任が読み聞かせる。PTAや地域の方の読み聞かせ。公設図書館の人のブックトークやストーリーテリング。図書係の児童による紙芝居や絵本読みなど。

●年間活動を見通した作文学習

行事だより・まちだより・季節だより・学級だより、教科書教材と連動した発展学習としての作文学習など。自己紹介の名刺作り、他者紹介の手紙作文、読書紹介の感想作文、学校紹介や家族紹介の説明作文なども。詩・短歌・俳句作りにトライする場の設定もおもしろい。

●なんてたってこれからはおしゃべり(話す・聞く)

ディベートだけが討論ではない。「先週のできごと」を語るような体験談スピーチコンテストなどもおもしろい。質問する子にも条件をつけて、スピーチしたことの内容の関連性を味のあるものにする。

●学習発表会に合わせて総合的な学習を企画

相談・調査・構成・記述・論述・質問回答処理といっ

た一連の過程を経ることで、聞く・読む・書く・話す学習を総合的に学ぶようにする。

このように考えていくと、日課表・週時程表(週案)、月程表(月案)、学期経営案、年間学習計画案と、その経営案は広がりや厚みをもっていることがわかる。

教科書の新しいページを開いたとき、自分の学級の児童にどのような形でこの作品(教材)と出会わせたらよいか、どんな学び(展開)を紡ぐと児童は楽しく力をつけていけるか、教師であればだれでもが考えることだろうと思いつつ続けた。ところが、昨今は必ずしもそうでもないという。「忙しくて、とてもそこまではできません。」ということらしい。

国語の教科書は、一つのことを独立して学ぶというものではなく、多方向技能を総合関連させた展開になりつつある。どの単元もおもしろい。しかし、おもしろさが勝って、育てるべき国語の力がぼやけてしまっただけ残念である。

学級の実態に合った能力指導体系をわかりやすく作りあげておくことが大切である。その体系図や表が「わたしの国語教室」という経営案にほかならない。児童の力がつく具体的な国語教室経営案が作られることを期待している。